

第9回塙保己一賞表彰式・記念コンサートを開催

～和太鼓演奏もあります。ぜひご来場ください。～

埼玉県では郷土が生んだ偉人「塙保己一」のように、障害がありながらも不屈の努力を続け社会的に顕著な活躍をしている方や障害者を献身的に支援している方を表彰する塙保己一賞表彰式を下記のとおり開催します。【本庄市共催】入場無料です。

日時 平成27年12月19日(土)
午後1時～4時
(午後0時30分受付開始)

会場 セルディホール



昨年の表彰式の様子

表彰式後の記念公演では、和太鼓奏者の片岡亮太氏と作曲家でジャズフレンチホルン奏者の山村優子氏による記念コンサートがあります。ぜひお出かけを。

受賞者の方々(主な受賞理由)

大賞: 笹川吉彦氏(82歳)(東京都世田谷区)
現公益社団法人東京都盲人福祉協会会長。小規模だった同協会を、入会時から支え続け、就労支援事業の展開、職業安定確保などにより拡大充実を図り、東京都高田馬場に現在の会館を持つまでに成長させた。

奨励賞: ロイ ビショツト氏(37歳)(滋賀県彦根市) バングラデシュ出身。国際視覚障害者援護協会の留学生として来日、現在、滋賀県立盲学校で教鞭をとる。2005年NPO法人バングラデシュ視覚障害者支援協会シヨプノ設立、募金により母国の視覚障害学生に奨学金を提供。

貢献賞: 社会福祉法人日本点字図書館(東京都新宿区) 日本初の本格的な点字図書館。創設者(設立者)は故 本間一夫氏。この図書館による情報は、視覚障害者の文化向上の礎として生活になくてはならない存在となっている。

顕彰会事業報告

塙先生百年祭記念碑に 説明用小看板を設置。

顕彰会では、平成二十四年度に移転改修した保木野の塙先生墓所の北隣にある「塙先生百年祭記念碑」の敷地内北東隅に説明用の小看板を設置しました。

塙先生百年祭記念碑は、塙先生没後百年の際に、塙先生の偉大な業績を表す目的で設置が計画されたもので、碑の題額(タイトルの筆記)が洪沢栄一によるなど、特筆すべき内容を持つものの、見学に訪れた人などから、どういふものなのかがわからないという声も寄せられていたため、今年度

説明看板を設置したものです。

以降は、小看板の文面です。

「塙先生百年祭記念碑について

総検校塙保己一先生の没後百年にあたる大正十年(一九二二)、記念式典が盛大に行われました。

この際、塙先生の偉大な業績を記した記念碑を建立することが計画され、全国から寄附を募り、大正十二年に、この塙先生百年祭記念碑が完成し、除幕式が行

われしました。なお、題額は洪沢栄一、撰文は東京帝国大学名誉教授 芳賀矢一という、ともに塙先生の業績を高く評価し、温故学会の設立を行った人物によるものです。

総検校塙保己一先生遺徳顕彰会



百年祭記念碑の斜め前に設置。



塙保己一先生はどんな人物か――

文・顕彰会事業委員 野口 茂



このたび、顕彰会事務局より会報誌の起稿依頼を受け思案を重ねておりました。種々の会合や事業等の雑談の中で保己一先生の話をすると、複数の方から聞かれるのが塙保己一とはどういう人なのか、偉い人だとわかっていても具体的になんか偉いのか、何をした人なのかをわかりやすく知りたいとのことなので、今回はわかりやすく保己一先生の人物について年齢を入れて、なるべく簡潔にあくまでもわかりやすさを主体に書きました。なお、堺正一先生の『奇跡の人 塙保己一』と太田善磨先生の『塙保己一』を参考資料とさせていただきます。

一、記憶力が非常に優れていた

塙保己一は七歳の時に目を患い失明します。当時は寺子屋制度の時代で、他の子どもたちが本を読んでいるのを外で聞いていて内容を全部覚えてしまい和尚さんを驚かせました。このため、保木野村にはなんでも覚えてしまう格別に頭の良いい子がいると世間で大評判となりました。

また、晩年の話ですが、ある

歌会の選者に頼

まれた際、詠まれた五十首を聴いた後、家に帰り歌を思い出すとどうしても三首だけ思い出せない。「わたしもこのようなものを忘れるようでは今年にも死ぬかもしれない」と寂しそうに言ったという話が残っています。七十歳になってもこのように記憶力は驚異的なものでした。他にも保己一のずば抜けた記憶力についての逸話はたくさんあります。

二、十二歳で最愛の母親を失う

目の病の治療のために藤岡の医師の所まで連れていってもらうなど、何よりも頼りにしていた母親を十二歳の時に亡くしました。この不幸な出来事が保己一少年にとって、自覚し自立する動機となり、人間として大きく成長していきました。

三、十五歳で江戸に旅立つ決意

江戸へ行くのと目の不自由な人が勉強する処があり、三味線や針灸などの指導をしてくれる師匠がいる

という話や太平記読みという、物語をしてお金が稼げる職業があるという話を知り合いの絹商人から聞いて、江戸へ行こうと強く決心します。お寺の和尚や父親が金策と江戸での滞在先確保に奔走し、傍示堂の内野伝左衛門という名主の尽力で旗本の永島恭林家の江戸屋敷に身を寄せて、近所の雨富須賀一校校の一座に入門できました。

四、雨富校との出会い

この師匠こそは保己一の運命を大成させた大恩人です。資金力、指導力、熱意、温情を備えた師匠が保己一の勉強好きをみて生活の面倒をみて、出世のための資金も用立て、次から次へと良き先生を頼んで保己一を大成させました。三十歳の時、「勾当（こうとう）」という上位の職位につくための百両は雨富校校が全部出してくれました。

五、無欲で清廉潔白な人柄

三十九歳の時、重い病にかかった師匠から遺産を保己一に譲る申し出がありました。しかし、保己一は「全て師匠のおかげでここまで出世することができ、ご恩は心に深く刻んでおります。そのお金は、他の弟子たちにお分けください」とかたくなに断りました。それ故、仲間か

ら慕われ周囲から尊敬されました。このように保己一は生涯無欲で通じた人格者です。

六、篤い信仰心、強い意志

三十四歳の時に貴重な書物が散逸しているのを嘆き、先人の文化を絶やさず後世の人々に伝えることが大事だと考え、書物を集めて分類し出版することを思い立ちました。そして、これから学問をしようと考えている多くの人や後世のために、一大叢書としての『群書類従』の出版を決意しました。この時、信仰する天満宮に、完成するまで般若心経を毎日百巻読むと誓いました。

七、三十八歳で校校に昇進

この校校という地位がその後の『群書類従』の大事業に役立ちました。それは、この地位により、公家、大名等が所蔵する貴重な書物に触れることができたからです。当時の書物は貴重であり滅多に他所の人間には見せないという閉鎖的な時代背景があったため、この役職により保己一の大事業の進捗は大変早まり拡がったのです。



一大叢書『群書類従』

